(36) 根羽沢（ねばざわ）金銀鉱山跡ー追追記版

岩友達に誘われ現地をまた訪れた。今回、既報で紹介していたＢ点付近で広い鉱山施設跡、橋脚の跡、そして肝心の坑口跡を確認することが出来た。既報で紹介している「鉱山図」の位置通りであった。本稿では、このＢ点付近の探査結果を主に紹介する。

探査日　２０２１年９月１９日

図１　今回の探査経路を水色で記している。今回も大清水休憩所の駐車場に車を停車させ、そこから徒歩である。今回は特に、Ｂ点－Ｃ点付近で「発見」があった。なを、Ｆ点、Ｇ点付近ではガーミンの即値にズレとばらつきが目立っていることに留意すること。現地は谷間となっており、電波の受信環境が悪かったと思われる。

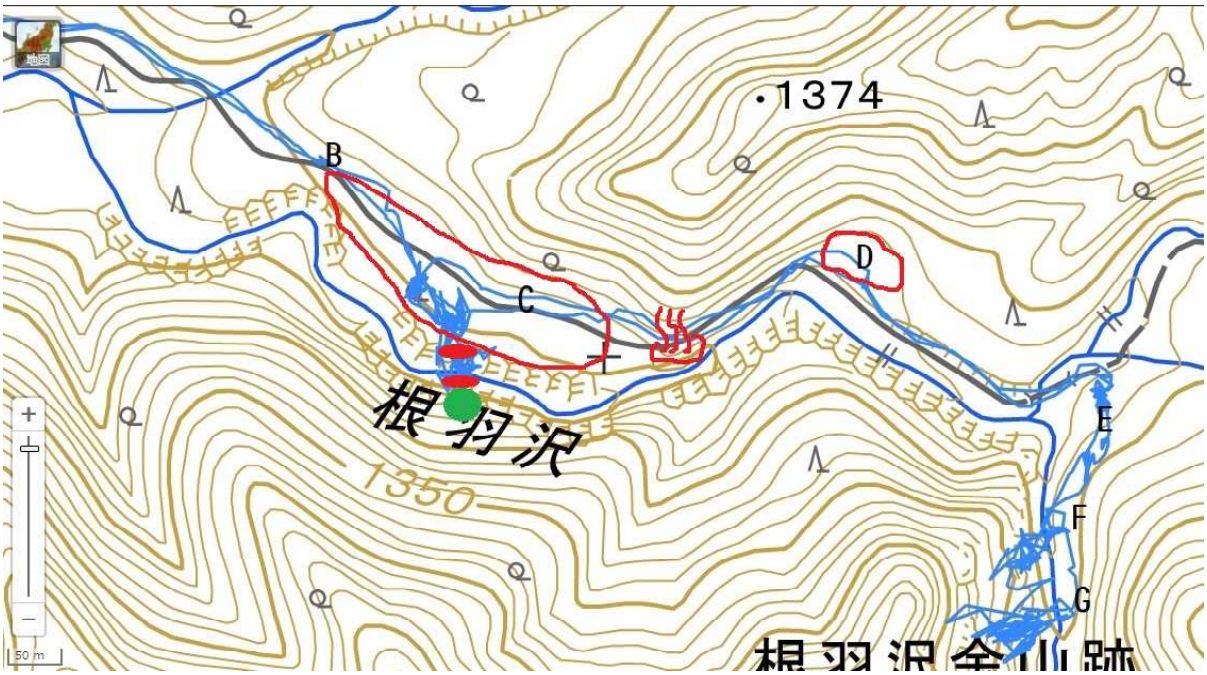


図２　図１の部分拡大図。今回は、既報で紹介しているＢ点－Ｃ点付近の探査結果を紹介する。Ｂ点からＣ点までは根羽沢の右岸の河岸段丘のような広いプラトーである。今回このプラトーに多数のコンクリート基台、基礎を確認した。また、左岸に坑口跡（図中の黄緑丸）、この坑口とプラトー部に架かっていたであろう橋の橋脚（図中の２つの赤楕円）を両岸で確認した。プラトー一帯には石英

の転石、ズリが多数あるが、良好な標本が見つかるかどうかは根気と努力次第であろう。
　本稿を書いている時に、現地の再確認のために、国土地理院発行の古い地形図を覗いてみた。図２中のＣ点より東側に「温泉マーク」があることに気がついた。図中にそれを転写している．根羽沢で温泉が出ていたという不確かな情報は耳にしていた。この古い地形図で確定できた。次回現地を訪れる時には､この箇所を確認したいものである。殆ど知られていない源泉なので、予想するに、源泉は余り大きくはなく、流量は少なく､温度も低い源泉と思われる。
　なを付加情報がある。図１中の右端に「湯沢」が明示された沢がある。明らかにこの沢に「源泉」があった証拠である。東側の物見山、鬼怒沼の下流域には多数の源泉があり、山奥の温泉地として著名な場所がある。

鉱山跡写真

写真１　広いプラトー部にあった高さが人の丈弱のコンクリート基台跡。写真の左手奥が沢であり、右手奥が林道である。建物の床であった部分に育っているダケカンバの太さに年月の長さを感ずる。

写真２　右岸から見た左岸側の「落差２０ｍの滝」。赤輪の上下中の白い部分は水。

写真３　その上端をよく見ると、自然の滝としては不自然な「水平な止水枠」がある。下の赤輪部分に。その上方には直線分の黒い箇所も。上の赤輪部分に。図２で見て取れるが、地形図によると、この付近には沢はない！
　坑内排水か？　それにしても量が多すぎていないか！

写真４　右岸を下り、沢床に降り、左岸の「滝」の側面を登り上がる。坑口だ。位置は既報の鉱山図通りだ。

写真５　内部を覗く。坑内排水の量が信じられないほど多い。今までこのような排水量に出会ったことがない。まるで奥で沢に通じているようであった。

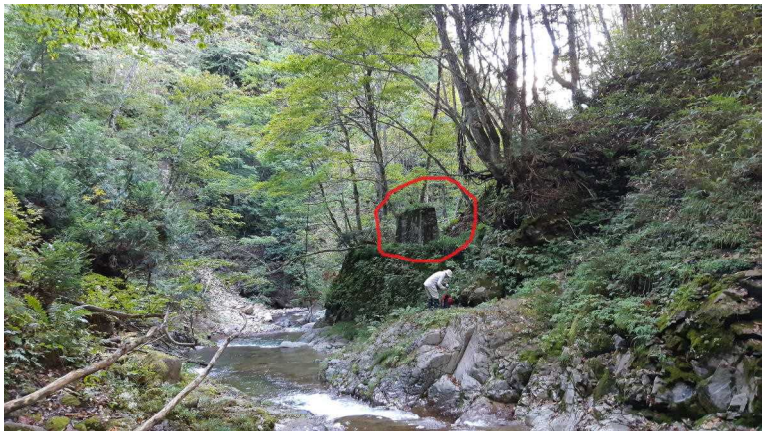


写真６　赤輪の所に岩友と右岸側の橋脚跡が見えている。この橋脚跡に対面している左岸側にもそれらしい橋脚らしい跡が坑口の真下部分にあった。

写真７　写真６で示している橋脚跡に対面している「滝」中にあった、平らなコンクリート基台跡。赤輪部分。

(36) 根羽沢（ねばざわ）金銀鉱山跡ー増補版

本鉱山の鉱山図が手に入ったこと。また、本鉱山へのＧＰＳによる経路ログを得ることから、１１月に久しぶりに本鉱山を訪れた。予想外のことに出くわした。１１月下旬であったが、未だ山にも全く積雪もないのに、何故か片品地区で先への道路が閉鎖となっており、一般車進入禁止。大清水まで８ｋｍ余りを歩くことになったのである。途中で道路工事が行われており、そのせいであったのかも知れない。

帰りには途中で鹿の駆除帰りだという地元の人の車に拾って貰った、感謝。

２０１９年１１月

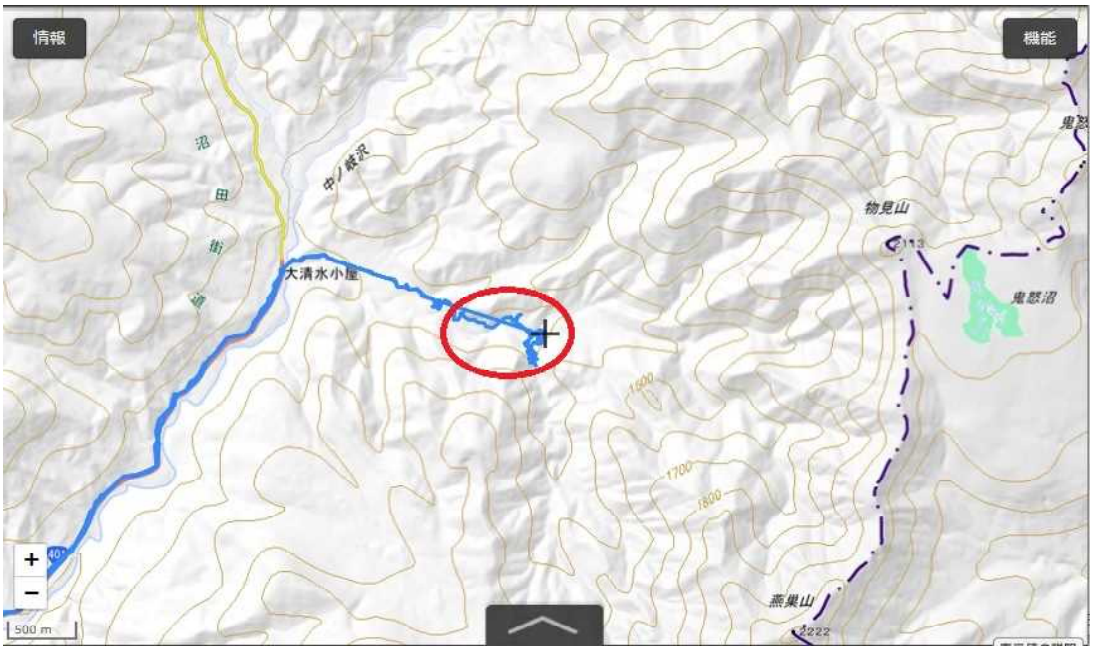


図１　尾瀬の南側からの登山口である大清水までなら、通常は車で行ける。冬季閉鎖である。赤丸が鉱山跡。昔－１０年以上前－は赤丸付近まで車で行けた。現在は林道は立派であるが、大清水橋の所で車の進入不可かも知れない。かっては進んで行けた林道が年々進入禁止になってるように思われる。林業の不振を物語っているのであろう。

図２　図１の部分拡大図。大清水から東方に延びている根羽沢に沿った林道を進んで行く。図中のアルファベット文字はチェック点。Ｇ点付近で確認した黄緑丸が坑口跡。Ｂ点とＥ点付近の茶色ベタがズリ、ともに広い。

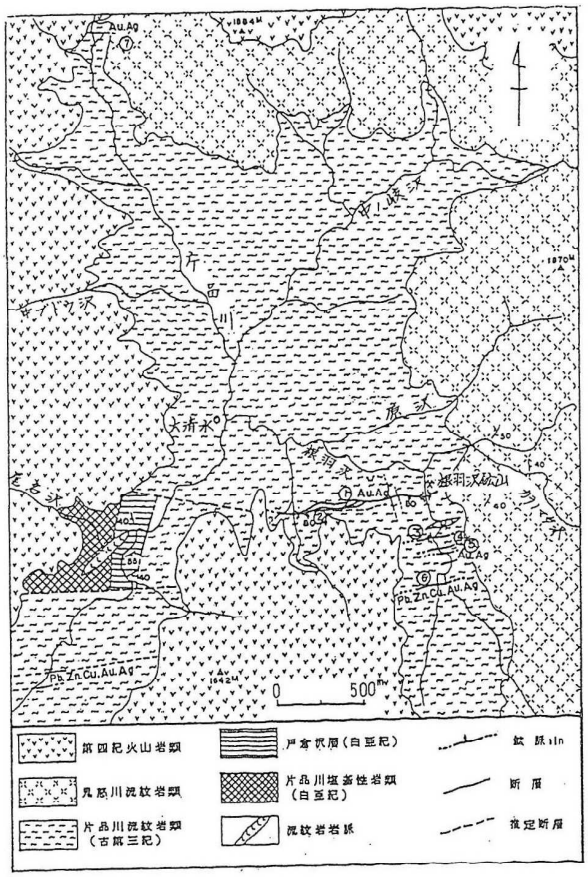


図３　根羽沢鉱山付近の地質図。
参考文献（１）より。

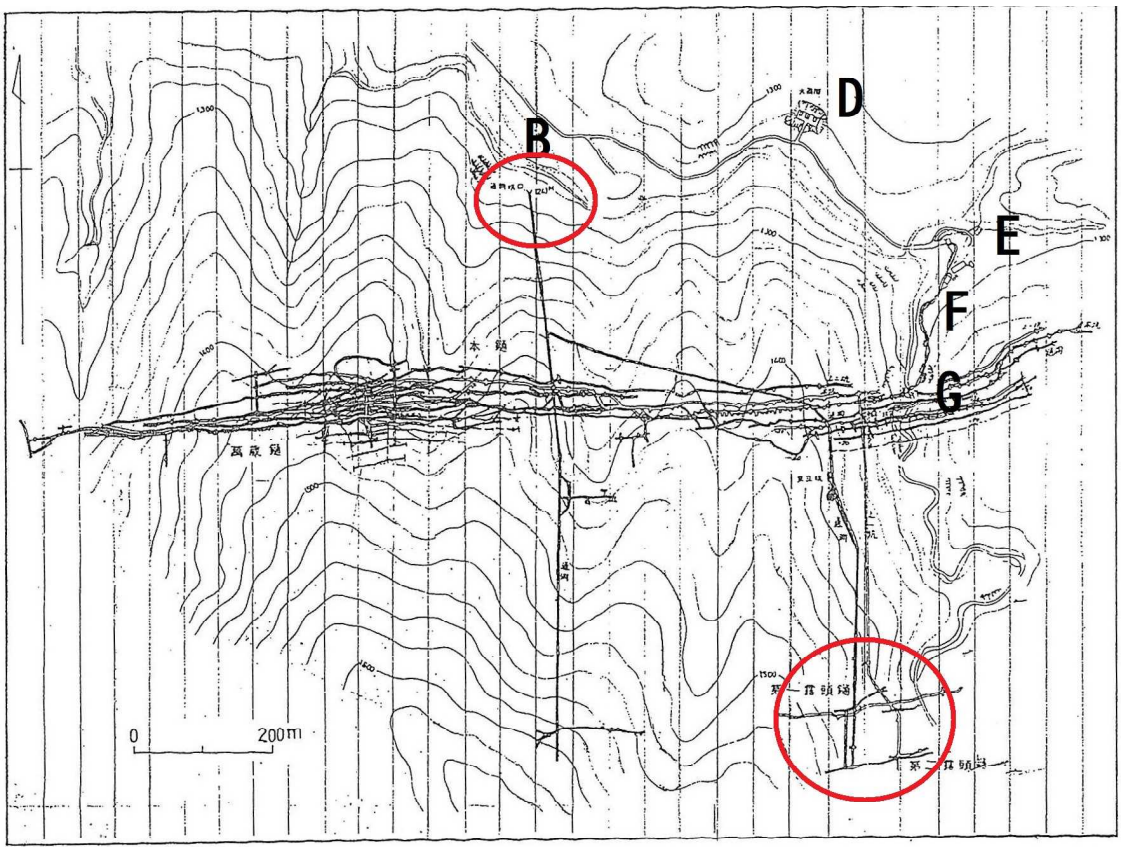


図４　参考文献（１）より複写掲載。図２と対照することが出来る。この図をよく見ると、Ｂ点付近の根羽沢の左岸に坑口記号がある。南方にある鉱脈への通洞坑のようである。ここから鉱石を右岸に出したと思われる。この右岸側の平らな所に広大なズリがあった。この箇所での沢は深く、また左岸側に坑口跡が視認できなかったので、左岸に渡ってのこの坑口の確認していない。状況から左岸と右岸の間に鉱石運搬用の橋が設置されていたと予想している。そのうちに、Ｂ点の赤丸の所の坑口、Ｇ点から沢の上流の赤丸付近の露頭鉱脈を探査してみたいものである。

鉱山跡写真

写真１　Ｂ点付近。左側は根羽沢。一帯ズリ、転石だらけである。

写真２　同じく、Ｂ点付近。林道から根羽沢方面を見ている。広いプラトーであり、前方の沢までズリ、転石だらけである。一帯に鉱山施設があったのかも。

写真３　同じくＢ点付近。古いコンクリートの基台が見える。鉱山の建物の基礎のようである。

写真４　Ｄ点付近。図３からすると、ここも鉱山施設跡と思われる。

写真５　Ｅ点付近。橋の前方には基底に石垣のある大きなズリ場がある。坑口跡は右手の沢の上流。

写真６　Ｅ点付近。Ｆ，Ｇ点のある沢の方向を見ている。水量が少なければ、この沢を登り上がれよう。

写真７　Ｆ点付近。沢より右岸に残っている鉄路を見る。

写真８　鉄路に近接し、鉄路の下の斜面を登り上がると直ぐに狭いプラトーに出会う。左側に坑口跡、沢の対岸にも坑口跡がある。そこにも倒壊しそうな古い鉄橋が残っている。

写真９　Ｆ点から、沢を少し上流へ行くと出会う小滝。水量が少なければ、先へ進めるかも、濡れてもかまわなければ。目前に沢を横切って数ｍ幅の石英鉱脈がある。既報の写真の通りである。その頭上には鉄橋が残っている。

写真１０　高台となっているＧ点から沢を見下し、露頭鉱脈を見る。

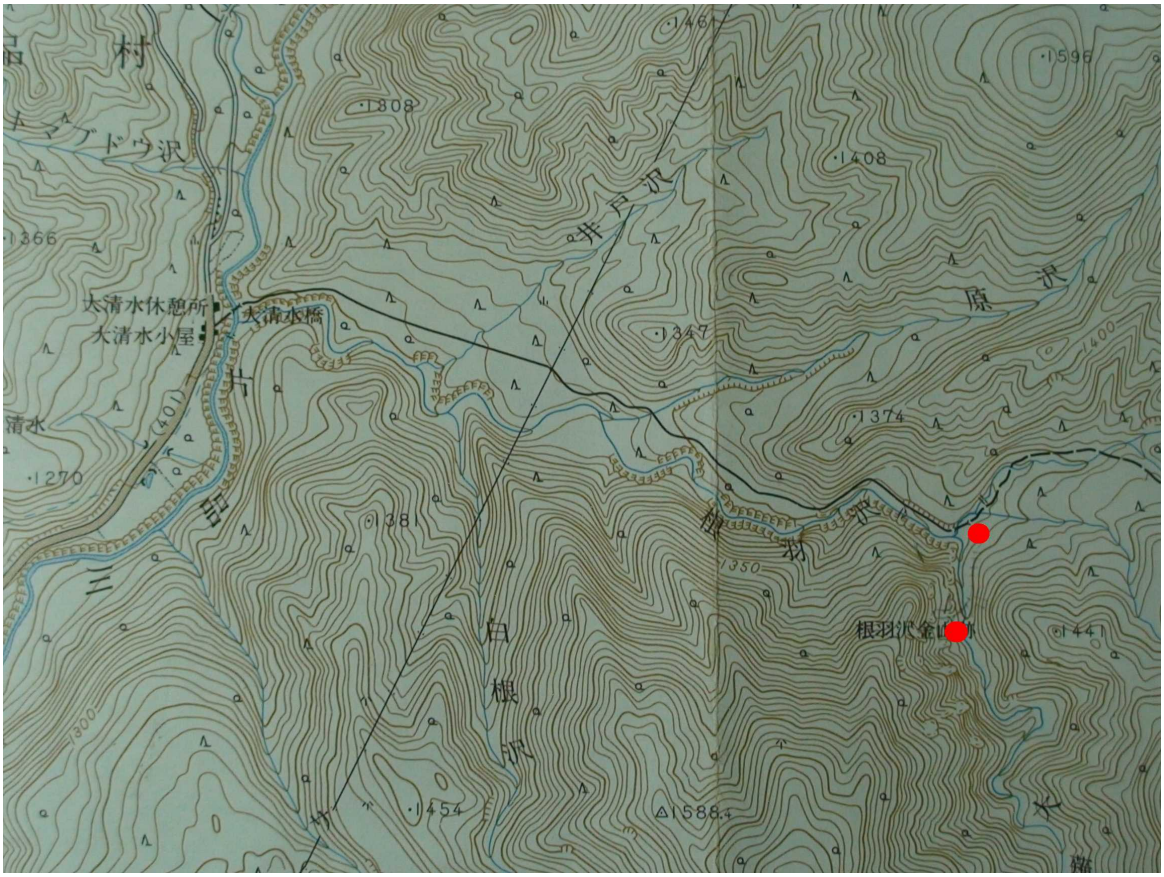
参考文献

（１）「日本金山誌　第４編　関東・中部」、社団法人資源・素材学会、１９９４年。

(36) 根羽沢（ねばざわ）金銀鉱山跡

参考文献（１）を手引きに、尾瀬の入り口である片品川の大清水から東方にある根羽沢金銀鉱山跡を探査した。この根羽沢鉱山跡の一番の魅力は、沢を横切っている数ｍ幅に及ぶ含金銀石英露頭鉱脈を直接見てかつ触れることができることにあろう。文献（１）には、産地位置図と詳細な産地見取り図が掲載されている。ので、現地までは不安なく到達することが出来る。一般市販されている尾瀬の登山地図に、大清水から根羽沢を経由して物見山へのルートも詳細に記載されているので、これも参考になる。昭文社の登山地図にはしっかりと「根羽沢鉱山跡」の文字が印字されてもいる。尾瀬の開山期は、根羽沢の林道への一般車の進入は禁止されている（写真）ので、車は大清水の有料駐車場に止めることになる（閉山期には、根羽沢の林道は車の通行が可となっているのかも知れない。広い林道を３０分以上歩けば、目の前に橋（物見橋）とズリ山が見える（写真）。地形図中の上の赤丸の地点である。現地である。ズリの上には、橋からズリに向かって左側に獣道があるので、それで簡単に登れる。ズリではこれはと言うものは見つけられなかった（鉱物眼識がまだまだ無いので）。ズリの先はまばらな木々の生い茂った平坦地である。かってはこの一帯にも鉱山施設があったのかも知れない。ズリの先の平坦地を、大薙沢を右下にして進んで行くと、トロッコの廃レールと、登山道ではないという掲示板＋柵がある。このトロッコ道は、坑口につながっている。途中の鉄橋は鉄骨だけが残っており、その上を渡るのはあぶなかしい。沢に降りて、沢を登ればよい。が、途中、幾つかの滝がある。水量が少なければ、滝登りも出来るであろう。が、旧トロッコ道、沢、滝の巻き道を組み合わせていけば、坑口近くまで安全にたどり着けよう（写真）。鉄橋の先に見える坑口は閉塞されている。坑口を目の前にして、左側から沢に降りられる。先人がロープを取り付けている。それを利用しよう。降りた沢の箇所が露頭鉱脈である。その様子を何様か紹介しておく（写真）。

参考文献（２）によれば、根羽沢鉱山は「古生層を貫く石英斑岩が発達し、その中の含金銀石英脈である。主脈は１条東－西、７０°南の走行傾斜である。幅２ｍ～３ｍ、延長１５００ｍ、・・・」の説明文がある。主脈が大薙沢を直角に横切っている様子を目の当たりに観察できる。



地図　　国土地理院地形図２万５千分の１地形図「三平峠」
探査日　　２００９年４月、その他の日
参考文献
（１）「鉱物産地をたずねて　＜増補改訂版＞」梅沢俊一、１９９５年、自費出版。
（２）「日本地方鉱床誌　関東地方」今井、河井、宮沢、朝倉書店、１９７３年。

鉱山跡写真

大清水での分岐点。この林道５０ｍ程先で片品川を渡り、その後、根羽沢を右下に見て進む。

林道を３０分も歩くと「物見橋」。目の前に、広い広場と高いズリの山がある。

最後の鉄橋。橋の先方に閉塞された坑口が見える。鉄橋の現状もわかろう。この鉄橋下の沢で、露頭鉱脈を見ることが出来る。この写真を撮影している場所付近にも廃坑口がある。この坑口は参考文献（１）には記載されていない。廃坑口には廃レールもあるので、奥の深い坑道であったようである。露頭鉱脈の配向からすると、沢を挟んで 2 つの廃坑が向き合っている配置となっている。1 条の鉱脈を沢を挟んで、東西に掘り進んだのであろう。

写真の下半分を露頭鉱脈が左右に配向している。以下、何様か同じ場所での写真を掲載する。露頭鉱脈の厚さは数ｍもある。下流に滝壺が見える。

採集鉱物写真

低品位の金銀鉱石の原石は、金色に光っているわけでも、銀色に光っているわけでもない。極めて優良な金銀鉱石（このような原石は銀黒と呼ばれ、灰黒い部分が厚い）でない限り、ただ見では、変哲もない石ころである。

写真で示しているように、鉱脈は足元一帯にあるが、極めて堅い。銀黒らしいところを切り欠こうとしても、並のタガネとハンマーでは歯が立たない。どこか欠け落としが出来そうな部分から採集するしかなさそうである。銀黒らしいところでそのような石英部分がなかなか見つからない。露頭鉱脈から探し出しかねたので､沢の転石として灰色～黒色の部分のある石英塊を適当に幾つかを採集した。大した物ではないので、掲載はしない。

追加録

幅２ｍ～３ｍの露頭鉱脈である。ならば、大薙沢の上流にも他の貫通鉱脈があるかも知れないと考え、沢の探査をしてみた。１時間以上登り詰めていったが、何も見つけられなかった。参考文献（２）には、脈は東西に延び、長さは１５００ｍとの記述がある。とすれば、隣り合う沢に脈が露出しているかも知れないとも考えた。地形図にみれる東側の沢の探査を試みた。細い沢で、草木が生い茂り、基盤岩の露出も見られなかったので、早々に切り上げた。山中で、未知の場所の鉱物探査を行う時期は、草木の枯れた晩秋から春先が宜しいようである。草木の生い茂った場所での探査は、既に探査済の場所とすべきである。貴重な教訓である。